



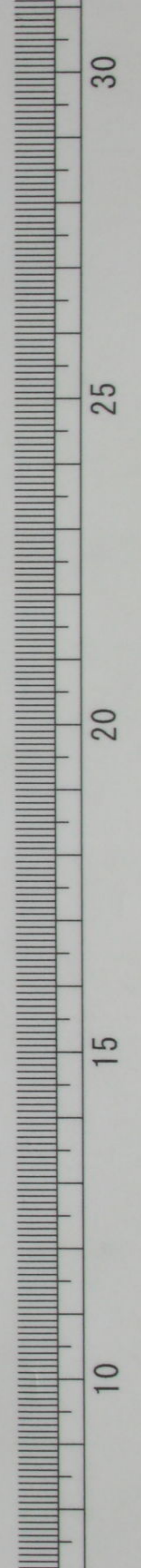
氏權孫栗毛

初篇
2

〜14
231
1

〜14
231
1

日
才
二
号
一
共
二



門八邊 14
號 137
卷 7

同會

權膝栗毛序

民權之事豈易道哉。學士噓々
轉于新聞紙上。辨士呶々噪于
演舌壇場。而上弥次喜太口吻
者。是篇為日下開山亦不奇的
烈矣乎。回想往日一句子之草

民泰更元

85
八
231
12



唐紹儀著 歐俊子題評

民權膝栗毛

初編 二冊

明治十五年九月出版

三書房梓

膝栗毛也。當時弥次喜太未開
耳。及魯文子之稿起。弥次喜太
乃半開矣。至是篇則弥次喜太
既丸吞開化與文明矣。吁嘻見
彌次喜太之進步。可以卜世態
之變遷。聽弥次喜太之御託。可

以察民權之繁昌。往日之彌次
喜太。與今日之弥次喜太。相距
僅數十有餘年。而其差別不啻
桑滄月鬢。余於是驚嘆不能措
真面目乎。作聖人之假聲曰。後
生可畏焉。知來者之不如今。

時維明治十五年、東帝已報春、
國花異將開之前、數十有餘日、

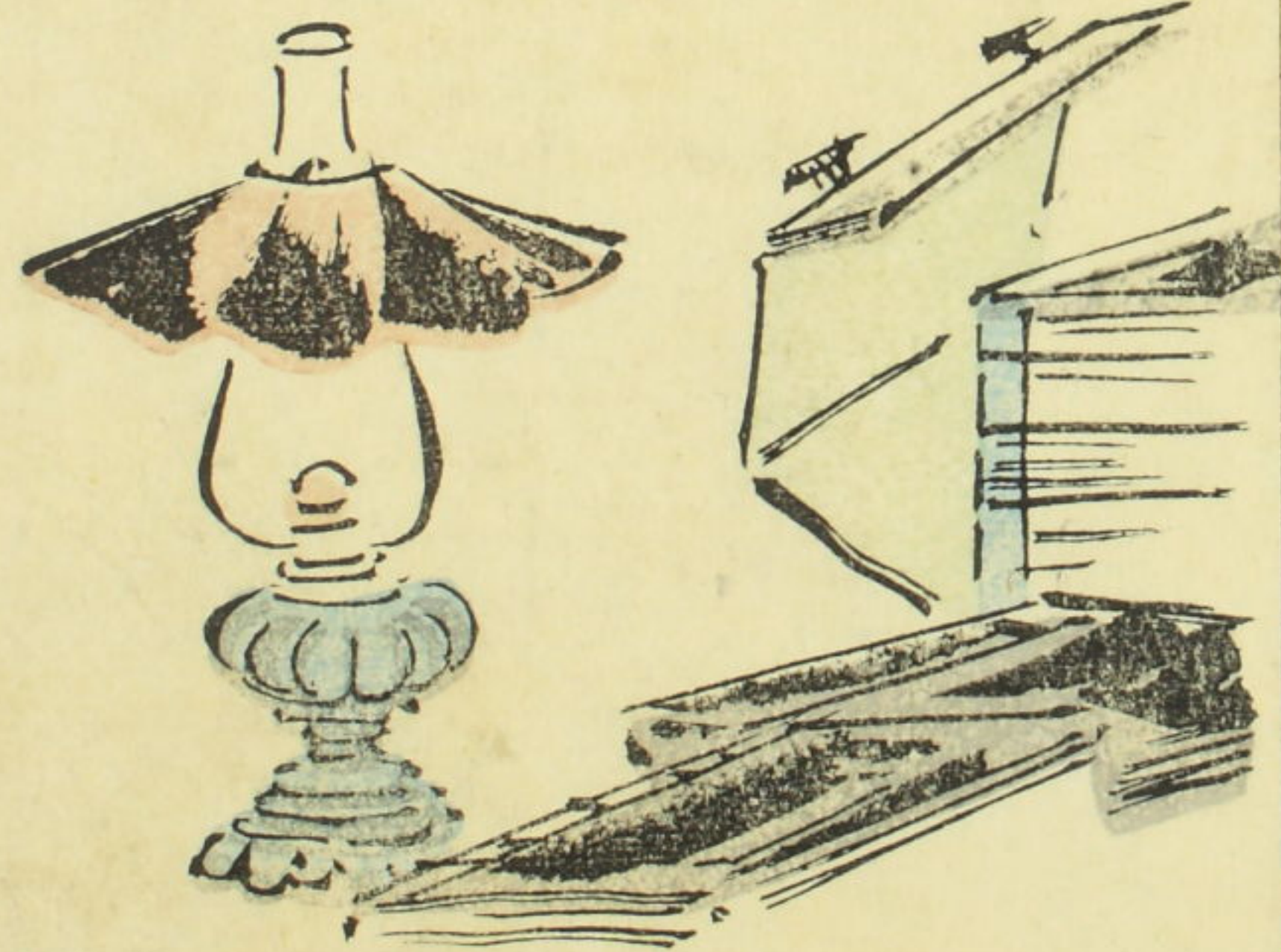
海東外史歐俊戲撰

海東外史

西塾松井書



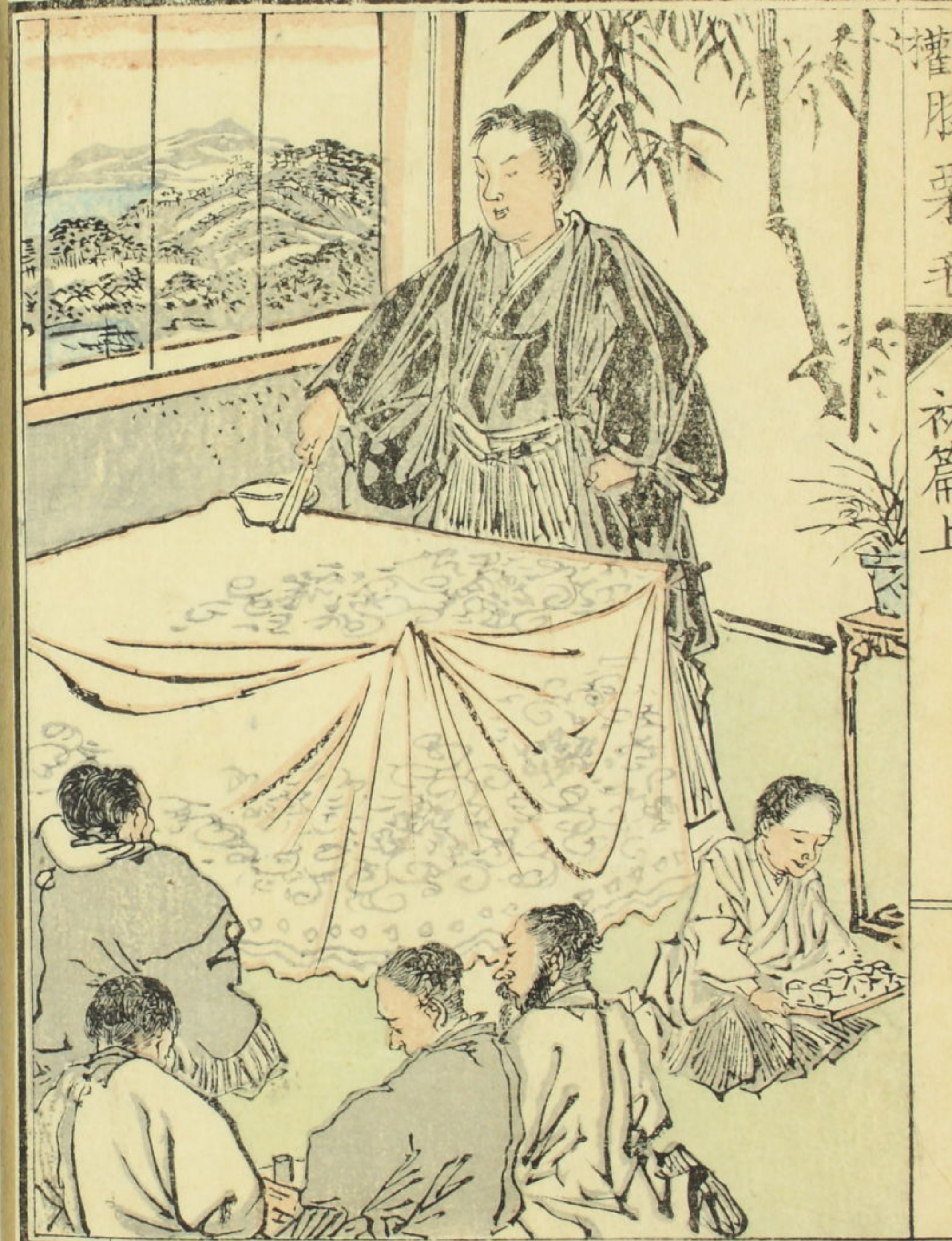
惟世宗玄





民
月

惟
無



權
形
果
毛
初
篇
上

不^不稱二百淺喜多然月
由^由五段^五取^取厚^厚年^年時^時
謂^謂者^者肯^肯不^不肥^肥壺^壺あ
輝^輝候^候の^の民^民権^権大^大権^権

明治十七年正月 醉翁道七次



氏權孫粟毛終言

福^福之^之り^り生^生び^びる^るを^をは^は福^福も^もあ^ある^るを^を生^生か^かん
を^を後^後孫^孫又^又漢^漢の^の上^上を^をな^なり^り初^初福^福改^改ま^ま下^下り
生^生か^か其^其言^言を^を奉^奉下^下み^みあ^あ衆^衆統^統る^る初^初把^把一^一衆^衆
ふ^ふ考^考ふ^ふこ^こと^と辨^辨め^めら^らる^る其^其言^言を^を何^何と^と考^考ふ^ふ
世^世を^を人^人の^の智^智を^をく^く私^私を^をあ^あれ^れと^と私^私を^をく^く
善^善悪^悪他^他自^自私^私を^をあ^あれ^れと^と私^私を^をく^く何^何と^と考^考ふ^ふ

少業が付きふれを初編を以て其の先きと
ふくまふ一級見えたるは皮を以て其の
形も尤もあてられぬ者なり
又下は海まで厚く又ねんては其の
んが持たすは其の形もあてられぬ者なり
歴法して中程より其の形もあてられぬ者なり
民権を以てつりやうも其の形もあてられぬ者なり

自ら業を以てなり民権を以て其の先きと
其の形も尤もあてられぬ者なり
又下は海まで厚く又ねんては其の
んが持たすは其の形もあてられぬ者なり
歴法して中程より其の形もあてられぬ者なり
民権を以てつりやうも其の形もあてられぬ者なり

民権要手 二

見ると喋り附る近所の老女へ五つ縄おろし
話よ来る者希なる又流石の世過も果せ返り
「是をやどうだ私ちの氏控を下す社もど文程
志ねへ積りてこ更へて此以トやアろく又来る
ぬへなまけぬへぬへまゝの海どの「カンをうよをま
どらなからつちの宿もどうやらどうやら身へさ
へ入るゝ世更後控もやアぬゝとるふの宿がよつて

来るららおきや氏唯余り急よ引込ふととてん
ごうら大者うらむとくすつとんごアな「控のふ急
のでん急の急で氏左控をへ面白くもぬへ「何よ
しろおらんどうて居てもぬえぬへが何愛へ氏
控のどいふせうけさうやアぬへ「幸ひさうは
日曜ごうら出うけさもい「可憐さをなくつても
後人よアアア「皇女はぬへら「皇女の身ごめ

一 世を子めくはきとまなこに致ゆふなりまひぬ
 こつとつらり受とまきと酒徳と手あふをいど民
 権とヂヤン巻とまらぐへやうつて懸絶といふの致
 澄泉といひをくならつとやアぬくう「ませつをへい
 替く橋きとどたなをかあそりして何處へは積ど
 立ぬを替のまへと人のまへりて民権を伸て
 こつとつと思ふのよ「民の民権を「おまの民権がサ

深川亭
 趣向
 フ借り
 来テ物
 情ヲ寓
 シ出ス
 慶筆カ
 老健

一 可んてふ「借合ののろ緑ハまうく又民権ハかまうく
 と「可んてふ「借合ののろ緑ハまうく又民権ハかまうく
 時ハ伸さぬく「可んてふ「借合ののろ緑ハまうく又民権ハかまうく
 「可んてふ「借合ののろ緑ハまうく又民権ハかまうく
 ろうた「深川亭へでらいつて筆「可んてふ「借合ののろ緑ハまうく又民権ハかまうく
 野の法「可んてふ「借合ののろ緑ハまうく又民権ハかまうく
 且「可んてふ「借合ののろ緑ハまうく又民権ハかまうく

民権

言てもお笑おきよ内後でやるトやアねへうらんも
 知らぬ受へへねへぞ一覺へたとい甲怯の一さり
 見うけと清原の彼こそ性よ云名の意あとも
 従きぬ油が財改イザ君乃よおられく可おぶ
 ねへそんな物を振舞をなそんなさうさう
 どうせざらく〜と居るら何愛う筆のま
 先生を君と何う話とも啖て民権伸張の

本刃が斬まうそれが甘くつさら帰るげ
 一壺やらら〜とはよう〜極妙ど君
 先生が例の度おぶならま物よあ〜とやら
 可りやア其時併〜後者へ行おも噂のけめへ
 鯉のき園も例きろこれゆき張本のる
 極め嘔文の〜ハイ〜私
 先生がのやを〜
 け神田子住女〜んでけすが先生のほ言

民権史
 六

惟此乃去認



お承り申して一寸は伺ふ御りお承り申して一寸は伺ふ御りの御申の御申をうとをうと思おも

ふ申いしが有り申いして申いしさういしと申いしういしらいしと申いしハイハイ

と申いして申いしさういしと申いしういしらいしと申いしハイハイ

申いしさういしと申いしういしらいしと申いしハイハイ

申いしさういしと申いしういしらいしと申いしハイハイ

申いしさういしと申いしういしらいしと申いしハイハイ

申いしさういしと申いしういしらいしと申いしハイハイ

申いしさういしと申いしういしらいしと申いしハイハイ

申いしさういしと申いしういしらいしと申いしハイハイ

申いしさういしと申いしういしらいしと申いしハイハイ

申いしさういしと申いしういしらいしと申いしハイハイ

申いしさういしと申いしういしらいしと申いしハイハイ

民

八

ありやうの海でござれハ折角のちぢたをさうお話
はひ免を被むる然一是れハ一依敷のまぢり
りしむるまぢり張おく通りと立座りのまぢり
上りやうのつらふお出下さい
地へ先生よりやア先生ののお書へ私らがさう
えんごうらふまぢりごもあつたなごも又逢ふ
でもなるとも仰えやうは先生に権向とある

權利中
自義
務アリ

喜八
亦異下
阿蒙
ニ非ス

くら私らハハハくとのふまぢりでござれやハハハ
一つ解せぬハ車がありやす先生がとちぢのちぢ
海と仰えやうごまぢりごおんあの中へ又
のまぢりもごまぢりやう海一私らごつら
用がまぢり先生のお話一又私らの海もつら
やせん海海細話を辭せむと何と知のちぢり
ありやハハハくちぢりごまぢりごまぢり
十

妙

みるはるるをせむは大方學者が學者を覺民のぞ
 其己のハチをり夢中 家でねらの考へるや
 一体學つあの空を飛ね人 今太の武權がまきく
 ちやアなるぬへ若ごとと思つくとは有り極にお談
 して骨が折れかたが下考人おハ終口と聞い
 致まやア頑といふぬサなんとも改ともは極がぬへ
 くらそこで思ひ何て先生をこも助た刀がぬあふ

Pさうとありつとより中 先 諸君の山海玉極
 然るべし居るは又よは力ある感得を
 今Pしと通り今らの用事 が重つておればこま
 へは話ハりつ後口うふは種ふ ねらるごとく
 せ川くちとくら後になんざアたりやアいけやせん
 先生も屹度今のみをた力なるんごごいや
 やうをんなる何れも玉家の為るがはくちつとア

淨瑠璃
ノ文句
ヲ踏襲
ニ來ル
處好手
段

波瀾

權時身毛 不審

心持しんぢりてお兵へいなせへ耐忍たうじん力りきがなけりやア申まうせ
でまき
望のぞみ來きやせんぜ先生せんせいの口辭くちじさうりくを程ほどとら思おも
とねどなもあいつがら娘むすめより來きの來きまを帰かへらじ
と何なにの事こと之これも内禮ないらいのせうこいないの我思わがしもまじ
わんの京みやこおと思おもへ欠かけ一いつ所ところも話わしとト下くださんせ
やのくくととひなを先生せんせいの條じょうへ却かへりやぶり附つ
おらよ思おも儀ぎな人物ぶつど傍そばへよるのけハハハハ格かく
と

世情寫
シ得テ
妙
先生利
ヲ見テ
變ニ應
ス現金
ト謂フ
ヘシ

どと先生せんせいも二人ふたりよアぢらぐんぐん旦たん那なお客きやく振びのおまま屋や
だし申まうしてこそこそ越こへへと一いつ魚うま斗とのこへへと酒さけ
いふ海うみを何なに押おしけよ望のぞみと先生せんせいのおひまが
つろつろまは右本みぎほんのよま支し州しゅうよそれハそれハくく配はい意い
せんもんせんもんとあると實じつハ種たねのこのこがまはくむゆえ
味あじへ死しハお路みち中なかまは先生せんせいはより西さい君きみの所ところ景けいをお
見み受うけは愛あい儀ぎ似にのこのこがらるらる其その子こを民たみ権けん所しよ
氏うぢ泰たい来らい三さん 刀たう音おん二に 十三

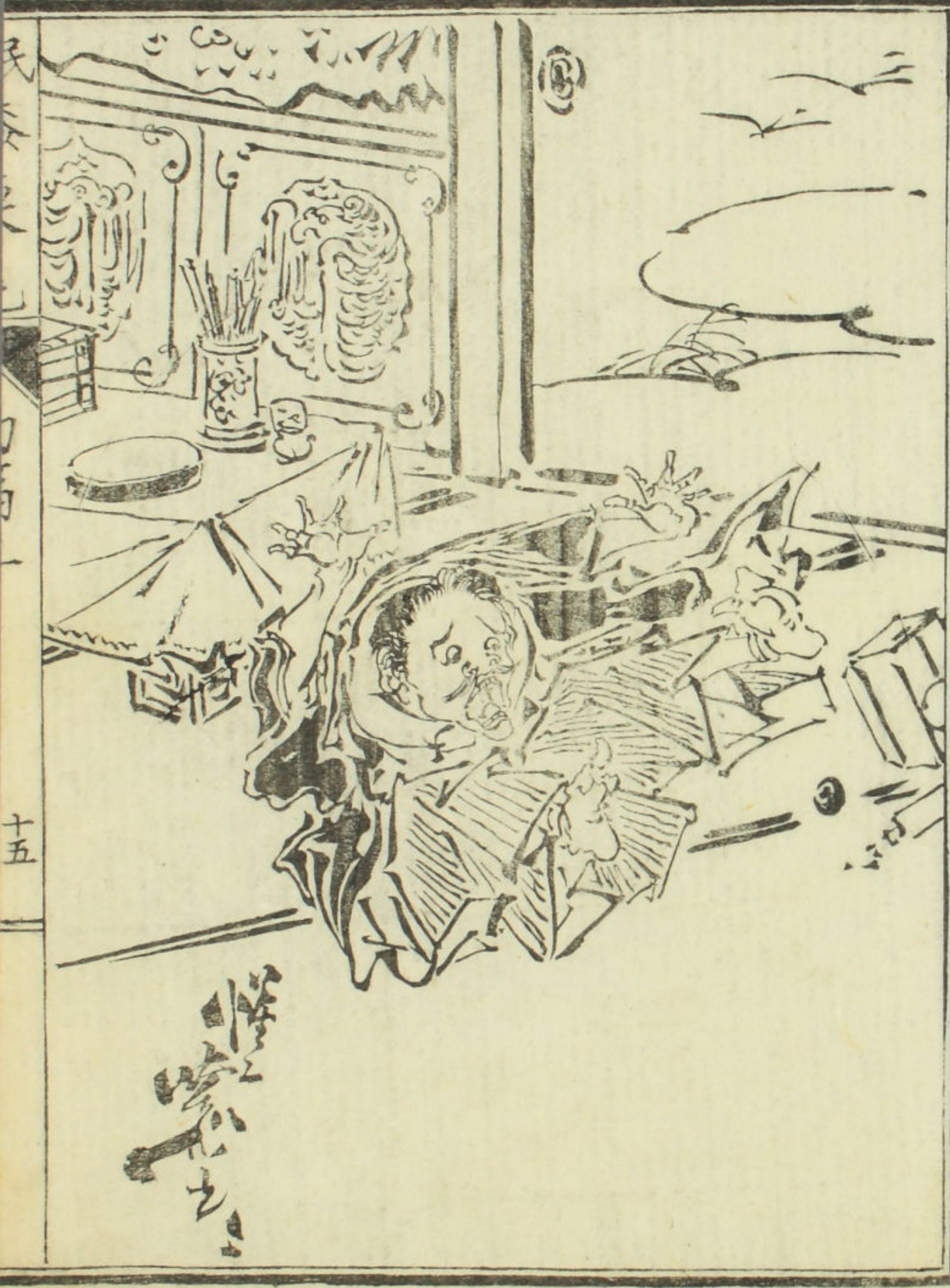
氏泰来三 刀音二 十三

本題二
八ル

伸張さうくちくば一と南のい せんなる年一は
智らく不意は揚き孝老並年や豪傑仲のい
自然と見識をまぐるら子細を一唯これ
こののせれ中ふあつとらん不中考を物とぬへ
くらつとハ九分が中あつとやア因に何れ何れ好方
がありやいめり 本徳を重んずるに重んずるが
解をねるといふんごつたつた平均とるやア何十

起事章
二段ノ
照應

糸ごうをせやせん 雲が多し酒よく甘くぬへ
後よとるなるをらアアなる其孝老と上言傑
隊が極く不安心サ不意の仇人又あつと民権の
なるのハ尤も茶へエそりやア妙ぶ學問がでまじや
百裡よりくるら民権なんざア丸口でこたはれておれ
の底であつたりなりんで公人が海へ 電がたつと
そら 手換ハ手とらぬ口でハ民権が握り生きたる



幸力老 健

言わりのそ衆人を膳無を以て其の甘けハおと書ふ
 ぬおしとらあ者あり文章の事こしくと其鋒
 犯をくうらぶるぬく見ゆれどそれ心ハ鬼より憾
 ころの世習溜として暗是なりでナ強ひさん
 私ちが又も通つてナア先子忠ハ世の番人であら
 さん其れひ此の如く家よ嘆息も地へぬ
 大まなやぐらのお身を先生嘆息が又一つ強ひアレク
 とらとまご寄おねらハ彼の言生め甘くやうやアがぶとナ
 擬のトへいげこむ

通つてとらゆれぬく見ゆれどそれ心ハ鬼より憾
 ころの世習溜として暗是なりでナ強ひさん
 私ちが又も通つてナア先子忠ハ世の番人であら
 さん其れひ此の如く家よ嘆息も地へぬ
 大まなやぐらのお身を先生嘆息が又一つ強ひアレク
 とらとまご寄おねらハ彼の言生め甘くやうやアがぶとナ
 擬のトへいげこむ

喜六八
勸進帳
金屋詞
ヲ摸ス
何等
老手ゾ
惜ヒカチ
虚田先
生関守
富樫ノ
役ニ不
足ナル
コト

ついでにから移るつやうに出来んでしやう
うサマアバサウとつくと友中や一やう抑一玉の物
まとりらバ ドーニチヤンク
其段を理めざるも外必の侮辱を蒙るに文徳上
の善処み一匙の歩を譲らば國元生業を
活潑なうゝ免地の由と仰ふを交とする是れ縁
して福まとりら又人の物まとりらバ

よき事よ かの世の業はこれ勅め教へ徳傳はる
の富貴教を以て此の所の能く教へ下交際と
修業は此を以て是れ教へて之れ理は此の由
理又因と来が愛一能中を是れ教へるのこれ
武権の大を以て物立體の業を以て之れ
之人権利を是れ親と道の在る所は教へる
如何世人と或る人又彼中一こが是れ如何なる人

